

伊勢神宮の御師廃止と参宮者の 関係性再構築に関する調査研究 ニュース・レター

[基盤 (C)、研究代表者：櫻井治男、課題番号：26370072]

No.1

平成 27 年

(2015)

3 月 1 日

禁無断転載

皇學館大学文学部櫻井治男研究室©
516-8555 三重県伊勢市神田久志本町 1704

● 目次	●
はじめに	櫻井 治男 1
本研究の目的と研究計画	櫻井 治男 1
研究メンバー紹介	2
調査報告 (1) 北九州における伊勢信仰の様相 …	櫻井 治男 2
「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」(仮題)について	八幡 崇経 4

はじめに

櫻井 治男

平成 26 年度から 3 か年の予定で、科学研究費助成事業の採択をうけることとなり、本研究にかかる情報交換と共有とをめざし、逐次その成果をニュース・レターにおいて公表することとした。

研究の主眼は、明治初年に、伊勢神宮改革の一環として行われた御師制度の廃止後における旧師職の動向を明らかにすることを通して、伊勢神宮と参宮者との近代的関係の様相を文献資料と実地調査に基づき具体的に検証するものである。廃業時に約 700 軒あった師職の状況についてその全体像は把握されていない。有力な師職は、自己の資源を活用し旅館業を営み、参宮者の受け入

れを行うが、そこでは変革前に見られた宗教的役割は減じ、世俗的な稼業への転換が図られる。しかしながら、伊勢参宮を行う地域社会にとっては、かつての御師への意識が継受される側面があり、これらの実態研究を深めて行こうとするもので、大方のご教示をいただければ幸いである。

本研究の目的と研究計画

櫻井 治男

本研究は、平成 23 年度～25 年度に科学研究費の助成を受けておこなった「近代の伊勢神宮改革と御師制度廃止に伴う伊勢信仰の相克に関する基礎的研究」(基盤(C)、研究代表者：櫻井治男、課題番号 23520088)を背景とし、新たに登

場した旧師職・中川采女家の資料に基づきながら、直接的に伊勢神宮との関係を失った旧師職のその後がどのような展開をはかったのかを検証しつつ、旧檀那地域の伊勢信仰の持続と変容とを解明することにある。本研究で特に焦点を当てる中川采女家は、御師制度の廃止後、伊勢神宮の内宮前において神洲館と称する旅館業へと転換がはかられるが、そこを利用する参宮者の実態、また采女家と師檀関係を結んでいた地域との関係、さらに受け入れた参宮者の在地における伊勢信仰の様相が、近現代においてどのような経緯をたどっているかなど興味ある問題を提起している。こうした問題意識をもとに、本研究では、期間中に、次の4点を明らかにすることに力点をおいている。

- ①新出資料の画像データベース化と研究上の共有資料としての活用化の方途を明らかにする。
- ②資料の解読を通して、近代における伊勢参宮者の動向を明らかにする。
- ③中川采女家の役割と従前の研究で明らかになった他の旧師職(特に岩井田家)との役割関係を分析することで、近代における伊勢参宮の時代的変遷を明確にする。
- ④旧檀那地との関係がいかなる実態的關係として継続され、それがどのように変化して行くかを明らかにすることにより、伊勢信仰の近現代的意味を考察する。

なお、比較対象である岩井田家については、その資料調査研究が、平成26年度・学校法人皇學館篠田学術振興基金の助成(代表・齋藤平文学部教授)を受

けて進められており、本研究との連携を行っている。また、岩井田家資料の調査研究成果については、『岩井田家未公開資料特別展 館町の御師』(平成26年2月)として冊子を公刊している。

研究メンバー紹介

研究代表者 櫻井 治男(皇學館大学文学部特別教授)

研究分担者 齋藤 平(皇學館大学文学部教授)

研究分担者 谷口 裕信(皇學館大学文学部准教授)

研究協力者 八幡 崇経(呼子八幡神社宮司、元皇學館大学研究開発推進センター客員研究員)

研究協力者 濱千代早由美(帝塚山大学・奈良大学・日本福祉大学非常勤講師)

調査報告(1)

北九州における伊勢信仰の様相 櫻井 治男

本研究にかかる現地調査を平成26年8月29日～30日に実施。参加者、櫻井治男、齋藤平、谷口裕信、八幡崇経、濱千代早由美。

8月29日

①福岡県朝倉市杷木林田の「伊勢大神宮」調査及び現地での伊勢講にかかる聞き取り調査。



拝殿



鳥居と大神宮扁額



伊勢講碑
(昭和 57 年 5 月)

②朝倉市西林田の「野津手神社」にて参宮記念碑・絵馬調査。



伊勢講記念奉納
(大正 6 年 1 月)



伊勢参宮絵馬
(明治 30 年)

③朝倉市山田の「恵蘇八幡宮」にて参宮記念碑・絵馬調査。



伊勢参宮絵馬 (同行で奉納)



伊勢参宮絵馬(昭和 28 年 1 月)



伊勢参宮絵馬
(大正 10 年 2 月・同行 56 名)



恵蘇八幡宮の
御陵参道
参宮記念碑
(昭和 49 年 1 月)

④大分県日田市立淡窓図書館にて伊勢信仰にかかる資料調査及び収集。

8 月 30 日

⑤大分県日田市の「大原八幡宮」調査。

⑥日田市夜明の「志賀神社」にて参宮記念碑・絵馬調査。



夜明志賀神社

⑦日田市祝原の「大神宮」にて参宮記念碑・絵馬調査及び伊勢講にかかる聞取調査。



大神宮扁額



大神宮拜殿と祠



日田市夜明祝原集落

⑧日田市中楚において伊勢講にかかる聞取調査。



日田市中楚公民館

⑨福岡県田川郡添田町英彦山神宮(参拝、宝物館・修験資料館見学)。

⑩大分県田主丸町鷹取「厳浄寺」及び同「地主宮」における参宮記念碑・絵馬

調査及び伊勢講にかかる聞取調査。



拝殿扁額
(内宮荒木田
経賢神主)



伊勢参宮記念碑
(昭和 43 年 8 月)



伊勢参宮記念碑
(昭和 59 年 9 月)

以上、10 か所において、集落における「大神宮」奉斎社、地域における「同行」の結成と現状、参宮記念の建碑、奉納品（燈籠、手水鉢、絵馬等）、英彦山信仰と伊勢信仰との関係などについて諸知見を得た。特徴的な事柄については、今後紹介することとしたい。

「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」(仮題)について

八幡 崇経

この度、仮題として一括名称を付した「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」とは、伊勢神宮内宮の神宮家として明治 4 年の改革まで禰宜職を代々務めた中川采女家(館町)が所蔵していた、

慶応元年(1865)4 月から、昭和 18 年(1943)3 月まで、78 年間にわたる自家宿泊者の記録簿 12 冊(後掲一覧参照)である。

資料は、被せ蓋形式の黒漆塗の木箱 1 個、伊勢春慶の木箱 2 個に分納されている。装丁は、No.4 までは袋とじ。No.5 以降については綴葉装、各冊とも表紙は神宮の神宝裂に似た錦で装丁されている。

資料名は、一番古い慶応元年の資料には外題内題ともに欠くが、明治 6 年以後明治 40 年 4 月始まりの No.2~7 の資料までは、外題もしくは内題等に「祈祷姓名簿」の表記が使われている。その後、No.8 の明治 43 年以後は「参宮記念名簿」となっている。

これらの資料の内容は、江戸末から近代にかけて、伊勢神宮を参拝した人たちが中川采女家に滞在した時の記録簿であるので、資料 12 点を一括して「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」としておきたい。(以下「参宮記念名簿」と省略。)

○

中川采女家は、御師として伊勢国朝明郡内 4 ヶ村に檀家を有し、配札高は 105 体とされ、神楽・止宿料ともに「無シ」とされている^(注 1)(「旧師職総人名其他取調帳」、以下「取調帳」と省略)。しかしこの「取調帳」の中には他に、中川采女家の家来だった宇治今在家の平師職正木大夫の項に「筑前国、筑後国、肥後国、豊後国右四ヶ国ハ中川采女ノ銘ヲ以テ配札」とあるので、参宮記念名簿はおもにこれら「中川采女銘」で配札された地域

からの参宮者他を記録したものということができよう^(注2)。

明治4年の神宮制度改革に伴う師職制度の廃止により、これらの家は御師としての活動を止めたが、この「参宮記念名簿」によれば、引き続き旧檀家を中心に宿泊の便宜をはかり、御神楽奉奠の仲介をしていたことが分かる。御神楽の仲介については、旧御師には補償の意味合いから、神宮から仲介料が支払われていた^(注3)。

また年代は未詳であるが中川采女家は、内宮の旧御師磯部光太夫、岩井田右近、柳谷太夫などととも参宮者の宿泊として、宇治橋前の「神洲館(鈴七)」という施設において共同で宿泊の便宜をはかっていた^(注4)。また中川采女家は「九州参宿本部」ともされていた^(注5)。この「参宮記念名簿」の資料を見る限り中川采女家は、北部九州に檀家を多く有していたようで、参宮者の記録簿である名簿もその施設で使用されていたと推測することが出来る。ただ、神洲館の宿泊者がこの名簿で全部かどうかは不明で、恐らくは合同した旧御師それぞれに旧檀家のための名簿があったのではないかと推測される。この点については、資料調査が進められている岩井田家右近家の資料等を参考にする必要がある。

○

記載内容は、参宮者の住所、氏名、続柄(一部)、祈祷料等の奉納金額、明治20年以降になると各人の年令と住所番地もほぼ付記されている。明治4年9月からは祈祷料の注記がなくなっているが、これは御師制度廃止の影響であると思

われる。以後は祈祷料・太神楽などの注記がほとんど記されなくなるので、実質宿泊料の記載と考えられる。その他の金額の注記としては、御供料、茶料、元大夫祝儀、また灯笼建立などのための臨時の奉納金額などが記されている。

詳細な内容分析については今後の課題であるが、通覧すると興味深い点を見つけてことが出来る。参宮者数や各団体の構成からは、明治5年以前には伊勢講や小団体が主で、明治6年以後になると、かなりの大勢の団体での参拝が目立ってきている。これは近世にあった旅行の制限が無くなったことが影響していると考えられる。なかでも「同行(どうぎょう)」の記載が増えている。同行とは、北部九州に広くみられ、近接年齢層の者で組織し地区内の宗教的な行事を中心に活動を共にするグループで、一生の付き合いをするとされる^(注6)。同行を地区内で結成して最初に参拝するのが伊勢神宮という地区は多い。この資料に記されている住所や年齢などの情報を含め分析することにより、近代の約78年間にわたる、伊勢参宮の詳しい動向を知ることができると思われる。

○

前述のように明治の神宮改革時に報告された「取調帳」によると、中川采女家自体の檀家は九州地区には無かったが、中川采女家の家来であった正木大夫が北部九州について、「中川采女銘」の配札を担当していたことが分かる。明治以後は、北部九州の旧檀家は中川采女家の「九州参宿本部」の神洲館へ集約されることとなったと推測される。これは、正

木大夫がこの地域の御師であったとはいえ、中川采女銘の神札を頒布していたことによると思われる。つまり中川采女家の家来である正木大夫は、地域においてはあくまで中川采女家の手代と同様の扱いだったという事を示しているようである。結果的に中川采女銘の御祓大麻を通じて結びついていた地域社会と中川家との関係は、近代にも引き継がれたと想定される。

このような御師活動の実態については、「取調帳」だけではわからないということは、従来から指摘されている点で、今回の参宮記念簿のような資料との照合により、実態を把握することができよう。^(注 7)また神宮改革当時の御師の対応などについても分かってくることと思われ、これから解明していかなければならない課題の一つである。

一方で、この資料によって近世から近代における中川采女家の檀家・旧檀家の参宮の実態を把握することが可能となる。例えば神宮改革後、旧御師が祈祷執行やお祓大麻を頒布できなくなるが、この資料に記されている金額が単純に止宿料のことだけかどうかという問題も興味深く、道中記などの支出と相互に検証することにより、旧御師の近代における経営の一端を知ることができよう。

さらにサービスを提供した中川采女家をはじめとする旧御師側の事情だけでなく、檀家側の参拝形態、頻度の変遷、参宮団の構成などにより、近代の地域社会における伊勢信仰のあり方について伺い知ることができると考えられる。更に、伊勢における旅館業の近代的展開の分

析も視野に含むことが可能であろう。

今回、資料の中に記録されていた住所氏名年齢などの詳細な情報を元に、福岡県、大分県の一部の地域で現地調査を実施したが(櫻井報告参照)、地域内での伊勢信仰のあり方、氏神社への絵馬などの記念物の奉納の状況など多くの情報を得ることができた。これら地域に残されたものとの照合により、さらに新たな視点を見出すことが出来よう。

以上、今後この参宮記念名簿は、神宮改革後の御師の対応や、地域社会での信仰のあり方の調査を進める上で貴重な情報源となり、近代における伊勢信仰の持続と変容について多角的で実態的な調査研究を進めることが出来ると思われる。

【注】

1. 「旧師職総人名其他取調帳」(『神宮御師資料』内宮篇所収、皇學館大学史料編纂所、昭和 55 年 72 頁)

2. 正木大夫が中川采女銘で配札した地域は下記のとおりである。

筑前国 12 郡内 122 ヶ村、筑後国 8 郡内 347 ヶ村、肥後国 1 郡内 2 町、豊後国 2 郡 74 ヶ村(「取調帳」158 頁)。

中館町の松井長大夫も中川采女家の家来であったが、九州の檀家は担当していない(「安政 2 年 9 月明治 4 年 7 月現在旧内宮御師名」(『神宮御師資料』内宮篇所収、皇學館大学史料編纂所、昭和 55 年 3 頁)。

因みに、宇治浦田の川上大夫は、中川采女銘ではなく「中川神主」銘で下記の地域へ配札を行なっている(「取調帳」152～153 頁)。

肥後国 5 郡 84 ヶ村、筑前国 6 郡 27 ヶ村、
肥前国 1 郡 2 ヶ村。

3. 「御神楽御饌取次切符報告書式」明
治 43 年(岩井田家資料)

4. 「いにしへの伊勢」

(<http://inishienoise.blog.so-net.ne.jp/2007-11-04>)

右側の看板に「九州参宮本部」とある。

5. 「中川采女神主封筒」(岩井田家資
料)

6. 『浮羽町史』335 頁 浮羽町史編纂委
員会 昭和 63 年

7. 『神宮御師資料』内宮篇所収の西川
順土氏の解説によれば「此の中には報
告しない御師もあり、また既に師職を廃
業した後で、檀家なしと答えた例」もあり、
実数ではないだろうと指摘している。

「中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿」(仮題) 目録(稿)

no.	保管	装 丁	資料名	期間
1	春慶箱 2	黄	[慶応元年 祈禱姓名簿]	慶応元年 4 月～明治 8 年 4 月
2	黒漆塗箱	濃 緑	「御祈禱姓名帳」 (題簽題)	明治 6 年 4 月～明治 12 年 3 月
3	黒漆塗箱	紫	「内宮神主中川采女」 (内題)	明治 12 年 3 月～明治 17 年 3 月
4	黒漆塗箱	藍	「御祈禱姓名簿」 (題簽題)	明治 17 年 3 月～明治 27 年 3 月
5	黒漆塗箱	錦	「御参宮人御祈禱姓名簿」 (題簽題)	明治 26 年 3 月～明治 32 年 2 月
6	黒漆塗箱	錦	「御参拝御祈禱姓名簿」 (題簽題)	明治 32 年 3 月～明治 41 年 4 月
7	春慶箱 1	錦	「参宮祈禱名簿」 (内題)	明治 40 年 4 月～明治 44 年 9 月
8	春慶箱 1	錦	「参宮記念名簿」 (内題)	明治 43 年 10 月～大正 3 年 4 月
9	春慶箱 2	錦	「参宮記念名簿」 (内題)	大正 3 年 4 月～大正 8 年 9 月
10	春慶箱 2	錦	「参宮記念名簿」 (内題)	大正 9 年 1 月～大正 11 年 4 月
11	春慶箱 1	錦	「参宮記念名簿」 (内題)	大正 11 年 4 月～昭和 3 年 4 月
12	春慶箱 2	錦	「御参宮記念名簿」 (内題)	昭和 3 年 4 月～昭和 18 年 3 月



神洲館(鈴七)(三重県伊勢市宇治今在家町 63 付近)



神洲館 (鈴七)

右側の看板に九州参宮本部と中川采女他の旧御師の名前が見える